



ノーブレス オブリージュ

Noblesse oblige

# 『貴き者の責務』 日本住宅公団初代総裁 加納久朗 第四回

作家 高崎哲郎

〈その家系③〉

文明社会の華族に列して

『夜明けの旗、父久宜の人生と偉業①』

加納久朗を語るには、実父久宜の71年の生涯とその大きな足跡を語らなければならぬ。『加納久宜集』(松尾れい子編)を参考にし、適宜引用したい。(引用をお許しくださった松尾様に御礼申し上げたい)。

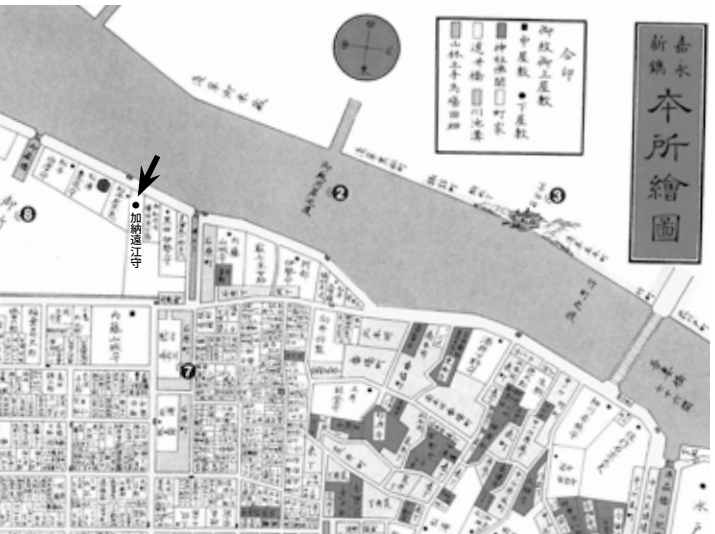
久宜は、嘉永元年(1848)3月19日、筑後国(現福岡県南西部)三池藩主立花家の7代藩主種善の弟種道の次男として、江戸・藩下屋敷で生まれた。三池藩は外様大名で1万石の小藩である。父種道は文武両道に秀で質素儉約を旨とし謹厳で学究肌の人物であった。父は生涯薄給(300石)のまま宗家立花家に仕え、江戸本所五ツ目に広がる三池藩下屋敷5000坪(1坪は3.3㎡)の屋敷を数人の家來とともに耕す「晴耕雨読」の生活を送っていた。次男久宜(幼名嘉元次郎、嘉永元年に生まれた次男との意味だろう)は父の養育を通じて、働く人への温情や節約さらには農耕への親しみを持ちながら育っていく。

突然、烈風のような悲劇が少年を襲った。安政2年(1855)10月の安政大地震で両

親ががれきと猛火の犠牲になり、少年は愛する父母を亡くし心の支えを失った。「予は一時に両親を喪て併せて家をも喪ひたる不幸の孤児となった」(『自伝』)。数え年8歳。彼の終生変わらない弱者に対する愛情や強く生きる決意は、少年時に両親を失った悲惨な震災体験(トラウマ)に遠因を求められる。彼は12歳年上の実兄立花種恭(後に幕府老中格)を親代わりにして、藩主の子として四書五経を讀解し、武芸を修得していく。勉強嫌いで

三国志や水滸伝を愛読する文学少年であり、体は弱かったが、外遊びが好きな活発な男児であった。乗馬も好んだ。年長の実兄種恭は両親を失った唯一の弟久宜を愛育する。兄の養母延子も孤児を快く迎えた。賢兄からの影響は甚大であった。

加納藩下屋敷(『江戸東京散歩』より、旧安田庭園)



◇

◇

なり、わずかに1か月足らずで2月にはすべての老中とともにその職を免じられた。国を東西に二分した戊辰戦争の最中であつた。『老中日記』(財)三池郷土館復刻)が残されている。『日記』は若年寄に任命された日から記述が始まる。その内容から判断して、開明的な名君、時勢を読める將軍側近と言つても過言ではあるまい。

「内憂外患」の時代であつた。ペリー提督率いるアメリカ東インド艦隊が伊豆・下田に入港して鎖国の長夜の夢を破つてから国内の情勢は急変し、尊王攘夷、公武合体、倒幕などの勢力が四方に起つて物情騒然となつた。徳川幕府260年余の覇権は大きく揺らいだ。幕府は3年12月突如として譜代大名の急登城を命じ、大評定の後京師(京都)に幕府軍の援軍として出陣を命じた。一宮藩主加納久宜も出陣を命じられた大名の一人である。この間の政治情勢について、久宜は幕府首脳の地位にあつた兄種恭から密かに情報を得ていた。種恭の『日記』には、在日フランス公使レオン・ロッシュと接触して内外の情報を収集したり軍事上の支援を求めたりする幕末の生々しい動向が記述されている。

『老中日記』の慶応3年(1867)8月16日の項に「弟嘉元次郎儀、加納大和守より急養子談、使者来る」とある。大政奉還の直前、姻戚関係にある上総国一宮藩(1万3000石)の藩主加納久恒が22歳で急逝し後継ぎ不在となつたことから、久宜は懇望されて養嗣子となり同年10月藩主となつた。19歳の青年藩主である。一宮藩の構成は家老2人(江戸藩邸家老200石、城代家老105石)、御用人4人(65石から120石)、御用人格2人(江戸藩邸、地元一宮、45石と70石)、

久宜は加納家の封土(一宮藩)を受け継いで日は浅かったが、幕府の危急存亡を傍観することに耐えられず、数百人の藩兵を率いて品川で和船などに分乗して出航した。向かう先は遠く京都であつた。途中、遠州灘で富士嵐の暴風に遭遇し、命からがら伊豆・下田に上陸した。天城峠の險阻な山路を越えて行軍を続けた。途中の梨本の宿では、幕府藩山代官・兵学者江川太郎左衛門が陣営を張っており、薩摩藩の脱走兵が迷い込んだ場合に備えて警戒を強めていた。久宜一行は薩摩藩脱走兵と誤認されて江川の農兵隊に襲撃されそうになつた。だが加納家の親戚筋に当たる旗本大久保家の領地が葦山付近にあつたことから、この領地の郡代が「大久保家の縁者の加納家の兵卒である。味方である」と江川

◇

◇

に伝えた結果、江川は加納藩兵への包圍網を解いたのである。

40日間の行軍の末に、尾張名古屋まで到達した。だが幕府軍は鳥羽伏見の戦いで大敗を喫し、將軍慶喜は大坂を海路で脱して江戸に帰還したとの情報を得て、撤退を決め再度一宮藩に帰つた。徳川家からの恩顧を捨てて朝廷側につく決断をしたと考えられる。天下の大勢は激変し、將軍は政權を奉還し王政復古の大詔が発せられた。明治元年3月に大総督府の軍が駿府に滞陣していた時、久宜は4月に初2000俵、永(永銭)250貫を献納し、5月に従五位下遠江守に叙任された。幕府側の大名として出処進退を誤れば藩の滅亡に陥る緊迫した状況の中で、青年藩主久宜は過激に走らざる確な状況判断で大過なく乗り越えた。兄種恭からの情報や連携もあった。

組支配物頭2人(60石、100石)、留守居席1人(55石)、大目付席2人(55石)…。久宜は洋式の兵訓練としてフランス式を取り入れた。これも兄からの影響である。

久宜は、明治2年(1869)2月、関東の列藩中率先して版籍奉還の建議を江戸城の太政官代に奉呈し、大小の列藩はこれに倣つた。二十歳の青年は、大学南校(現東京大学)の開校と同時に入学しフランス語を学んだ。公卿諸侯のうち南校の学生だったのは、柳原前光(後に外交官、元老院議長)、西園寺公望(後に政友会総裁)、米津政敏(後に陸軍将校)と加納の4人であつた。久宜の欧米文化や外国語を進んで修得する精神は子息久朗らのもとより孫の代にまで及んでいる。彼は若くして一宮藩知事を務めたが、明治4年廢藩置県となり藩知事を免じ



加納久宜胸像(千葉県一宮町議会場)



られた。

再三の欧米への留学希望は親族の反対で果たせなかった。だが大学南校の語学教師で、後に文部大臣森有礼の右腕としても活躍し、最初の文部省次官となった辻新次から、人材不足を理由に仕官を奨められた。兄種恭に相談し、人材不足が解消するまでを条件に、明治6年11月、25歳で文部省に仕官した。八等出仕に任官した（今日の文部官僚・課長補佐クラス）。文部省時代には、石川県巡視時に、旧加賀藩以来の士族中心の教育であることを鋭く指摘し、四民に開かれた近代教育へと導いた。静岡、山梨、東京の小学校など合計139校を巡視した報告書は、明快な文章の運びであり、ひと目で分かりやすい表も添付している。論理的な思考方法を既に修得していたことをうかがわせる。

◇

「華族の学校」である学習院の創設に、28歳の久宜は兄種恭らとともに深く関わった。教育と人格を重視する、同時に進取の気象に富む彼らの家系を確認するうえで重要である。江戸後期に京都に設立された学習院は、当初公家の子弟の教育施設を目指した。幕末の尊王攘夷運動が激しくなった頃には、尊王攘夷派の少壮の公家や長州藩士らの拠点となり、諸国の有志の建白の提出所ともなった。王政復古の大変動によって、学習院の組織も根本的に改められることになり、一時大学寮代となった。だが国学の台頭によって皇学所が設けられて、旧学習院は漢学所となって並立することとなった。東京に遷都することに

◇

1月生まれ、著名な農学者、キリスト教牧師、アメリカ永住)。四女國子(明治23年生まれ)。五女八重子(明治24年8月生まれ)、六女治子(明治25年8月生まれ、国務大臣後藤文夫夫人)、七女夏子(明治26年9月生まれ、実業家麻生太賀吉母堂)。この他立花家からの養女もあったようである。大家族である。夫人文字は明治26年他界し、後妻として旧幕臣原三蔭の次女鑑子を迎えている。

◇

久宜は、明治12年全国一の規模をほこる新潟学校校長に赴任する。31歳。(新潟県は明治26年まで人口日本一)。同校は中学、実学、外語、男女両師範、付属小学校の6部に分かれた総合学校で、児童・生徒数が多いうえで校風もバンカラで生徒がストライキで学校当局の方針に対抗することもまれではなかった。そのため校長赴任を希望する教育者が現われず、久しく校長が欠員のままという「悪名高い」難校であった。加納は赴任早々全教職員・生徒を前に決意を表明した。



子爵授与状 (明治17年、宮内卿伊藤博文授与)  
(一宮町教委「加納家史料」)

「もし君たちが非理の挙を敢て行い、不法の行動をとり、学生の本務を誤る場合には、予は教育界の名誉のために、400人や500人程度の学生を放逐するくらいなことは朝飯前の仕事に過ぎないと覚悟している」  
彼は学校の経営に大改革を加え、熱誠を込めて教育に当った。新潟学校の粗野な生



立花種恭 (学習院初代校長時代、『学習院百年史』)

至って閉鎖された。

明治政府は、明治2年6月諸大名に版籍奉還を許したのに続いて、公卿・諸侯の称を廃して「華族」とし、地方官以外の華族には東京居住を命じた。明治4年10月、明治天皇は華族一同を召され、旧制を一新して列国と肩を並べようとする時にあたり、華族は率先して才智を研ぎ勤勉の実を挙げるべきことを論され、修学に意を用うることを教示された。

華族の多くが孤立散居していたので、まず協和結合する必要があると感じ、明治7年に華族会館を設立し、それぞれの資金を拠出した。明治9年1月12日の華族会館新年会において学校建設の議が興り、直ちに建設の準備に着手した。同月19日には、華族立花鑑寛(久宜姻戚)、同立花種恭、同加納久宜の3人が長文で具体的な学校建設の建議に「華族学校設立大意」を添付して提出した。建議の中で立花ら3人は、華族が負担する大きな責務と負担を尽すためには、大きな教育を授ける必要があるが、華族会館が勉学局を設けた理由もそこにあるが、勉学局のごときは一時の間に合わせであると言わざるを得ないとして、「速やかに体裁を改め、西洋各国の貴族学校の規模にならった堂々たる華族学校を設立すべきである」と主張した。こうした意見に基づき華族学校設立大意」が作成され具現化された。

徒に対しては毅然とした対応を貫き、勉学を愛する学生を育て、難校の校風を刷新した。自ら国語教材や辞書の編纂を行い、県内の学校ではいち早く図書館を設置した。彼はその後赴任する鹿児島県でも図書館設置を優先させた。私財を投じても図書館の建設を進めるのである。

◇

久宜は、明治初期教育に功績を挙げた後、明治14年(33歳)から13年間法曹界に身を置く。彼は学校長として地方勤務を続け妻は同伴させるものの、幼い子供たちは東京に残して分かれ分かれの生活を送っていた。家族を二分する生活に養育上の不安や不自由さを感じていた。

◇

政府は刑法と治罪法(今日の刑事訴訟法)を公布して明治15年1月から実施することになった。全国の府県に裁判所を増設し、裁判官の大増員をすることになった。久宜も司法界への転身を懲瀆された。法律のことは全く門外漢だった。だが東京・大森の自宅(東京府荏原郡入新井村新井宿、現大田区入新井)に帰って家族と一緒に暮らし、勤務のかわら法律を研究すれば勤まらないこともあるまい、と考え教育界を去って法曹界に入ったのである。任地は東京とばかり思っていたが、熊谷裁判所勤務を命じられ、意外な任地に、司法当局に対して苦情を申し込んだ。司法当局首脳からは「裁判官の席次は位階順だから、従五位の肩書きのある君を東京に置けば、東京司法界の筆頭判事に立てなければならぬ。法律のほの字も知らない駆け出しの

「英国貴族の子弟教育」(パブリック・スクールの教育指導)に範をとっていることも記されている。Noblesse obligeの精神修練を高く掲げたのである。

同年8月、宮内省より明治10年から24年までの15年間、毎年御手許金1万5000円ずつ、学校敷地として神田錦町3丁目の7990坪を下賜される旨の伝達があった。明治10年10月17日学習院の開業式が行われ、明治天皇は皇后(昭憲皇太后)とともに親臨された。初代の校長は立花種恭であった。久宜の次男久朗、三男久憲も同校で学ぶことになる。

◇

久宜は、文部省退任後、地方視察の際に昵懇の間柄となった若手県知事島惟精に頼み出て、同県師範学校(現岩手大学教育学部)初代校長・岩手県学区取締総監督兼務に就任した。教科書を作成し、冬季のため体育館の建設、県内を巡視するなどして県全体の教育を牽引した。この頃、旧幕臣大久保教義の次女文字(嘉永5年3月生まれ)と結婚したと思われるが、具体的な年月日は確認が取れない。ここで家族についてふれておく。長女嘉子(陸軍中将武田三郎夫人)が明治11年10月に生まれた。長男久元は明治13年9月生まれで、ジフテリアで夭折した。次男久朗は明治19年8月生まれで、長男夭折により事実上の加納家嗣子(後継者)となる。次女次子(明治15年3月生まれ)。長女嘉子は嫁いで間もなく他界し、三女冲子(明治17年1月生まれ)が武田三郎の後妻となる。三男久憲(明治22年

判事を一躍東京司法界の筆頭に持つて来るのははなはだ滑稽で、君も困るだろう。こんな事情から法律修習の間、東京に近い熊谷裁判所勤務としたのである」と説得された。久宜は、1年限りの地方勤務を条件に任命に応じた。この間の経緯を、彼は「手記」の中で「生涯で一番不愉快千万な時代だった」と回顧している。1年間勤務した後東京に帰り、そのまま司法大臣に辞表を提出した。司法大臣大木喬任は驚いて久宜を大臣官邸に招き一旦依頼免職とし、1か月後に改めて大審院(今日の最高裁判所)検事に任用した。今度は加納が恐縮して、大臣の情あるはからいに感謝し以後職務に精励した。久宜は、13年間司法界にあつて「裁判官らしからぬ裁判官」として異彩を放った。

明治17年(1884)の華族令で子爵に任じられた。明治23年に第1回帝國議會が開催されると貴族院議員に選ばれて子爵グループのリーダーとして活躍する。明治26年、内務大臣井上馨(長州閥の雄、後に元老)より、鹿児島県知事就任を打診され、「難地の名ある地方の知事たるは誠に本懐これに過ぎず」(『自伝』)と直ちに快諾した。明治27年1月、家族全員に乳母2人を加え総勢13人、一家あげて赴任する。

(参考文献・千葉県一宮町教育委員会蔵「加納家史料」、『加納久宜集』(松尾れい子編)、『学習院百年史 第1編』、『アメリカ生活 60年、在米同胞の一人として』(加納久憲自叙伝)、『福岡県百科事典』、『ふるさと今昔』(上総一ノ宮郷土史研究会編)、『一宮町史』、筑波大学付属図書館資料など)。

(つづく)。